

|||||
総 説
|||||

学術用語におけるラテン語の影響についての研究

平 井 美津子

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

The Study on the Influence of the Latin language on English Technical Terms

Mitsuko HIRAI

(Dept. of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University)

Abstract

Latin is now said to be a dead language. However, it has still survived in English, especially in books and papers of natural science. Many English words are derived from classical languages, ancient Greek and Latin. In this paper, I outlined the history of Latin and the structure of academic terms. Then, I listed English irregular plurals derived from Latin, which are often used in natural science, and examined the time they were introduced into English. As a result, I found out that most of the English irregular plurals originated from the plural forms of subjective nouns in Latin, and were introduced into English between the 16th and 17th centuries. In the 18th century, English was grammatically established as language. At the same time, the influence of Latin on English waned, while English increased its popularity as an international language.

Key words

Latin, Old English, Roman Empire, Romance languages, plural, technical term

要 旨

ラテン語は現在、死語といわれている。しかし今も英語、特に自然科学分野の書物や文献の中で生き続けている。英語の多くは古典語、すなわち古典ギリシャ語やラテン語に由来しているといわれている。今回、まずラテン語の歴史および学術用語の構造について概説した。そして、自然科学分野の英単語に多く残っているラテン語由来の英語の不規則な複数形を取り上げ、英語への導入年代を調べた。その結果、多くの不規則な複数形は、ラテン語の主格名詞の複数由来で、16～17世紀に英語に導入されたものであることがわかった。18世紀には英語の文法が確立し、国際語として英語が拡大するのに伴い、ラテン語の影響力は衰えていった。

キーワード

ラテン語、古英語、ローマ帝国、ロマンス諸語、複数形、学術用語

1. はじめに

ラテン語は現在のイタリア語、フランス語、スペイン語などのロマンス諸語の祖語で、複雑に語形変化をするので、実際に使っていた時代のヨーロッパ人にとって厄介な言語であった。

ラテン語は現在、死語といわれているが、医学や生物など自然科学分野における学術用語には、今もなおラテン語が多く用いられている。今回、18世紀までヨーロッパの共通言語であったラテン語の歴史的背景をふまえた上で、自然科学分

野で習得しておくことが望ましいラテン語の文法知識を取り上げ解説し、学術用語の構造について述べる。そしてそれに基づき、不規則な形をしている英語の複数形の中でもラテン語由来の複数形を取り上げ、その導入年代から、英語の複数形 -s が確立した年代をラテン語の視点から推測する。最後に、なぜ学術用語にラテン語が多く用いられているのかについて考察する。

2. ラテン語の歴史

ラテン語とは、ローマ帝国で使われていた言語である。元々は古代ローマに定住していたラテン人が話していた一地方語である。ラテン人は紀元前11世紀頃に、イタリア中部のラティウム地方に住んでいたが、紀元前8世紀にそこにローマが建国され、彼らは自らをローマ人というようになった。しかし、当時の彼らは言語をもたなかった。そこで紀元前2～3世紀頃、ローマ人より早くギリシャ文化と接触して高度な文化生活を営んでいた、エトルリア人を介してギリシャ文字を取り入れ、それをもとにラテン文字（ローマ字）を創り出した（表1）。その後ラテン文字は必要性に応じて、CからGを、IからJを創りだし、区別のなかったUとVを別のものとして定義し、ギリシャ文字のΥを借用してYを創りだし、廃字となっていたZを復活させて25文字となった^{1)2)3)注1)}

ローマは領土を拡大し、ラテン語はローマ帝国の公用語となった。395年にローマ帝国が東西に分裂した際に、東ローマ帝国の公用語はギリシャ語となった。476年に西ローマ帝国が滅亡したのに伴い、ラテン語の教育機関の多くが消滅し、ラテン語は一般の人々から離れ、教会の中で細々と生き続けることになった。話し言葉のラテン語の消滅が公式に認められたのは、813年のトゥールの公会議である。この時「説教はもはやラテン語ではなくローマニアの、あるいはゲルマーニアの俗語でこれを行うべし」と規定されたことがきっかけとなっている⁴⁾。この後、ラテン語が一般的に話されなくなった

表1 ギリシャ文字からラテン文字

ギリシャ文字	初期ラテン文字	後期ラテン文字
A	A	A
B	B	B
Γ	C	C G
Δ	D	D
E	E	E
(F)*	F	F
Z	(Z)*	Z
H	H	H
Θ	—	—
I	I	I J
K	K	K
Λ	L	L
M	M	M
N	N	N
Ξ	—	—
O	O	O
Π	P	P
(Q)*	Q	Q
P	R	R
Σ	S	S
T	T	T
Υ	V	V U Y
Φ	—	—
X	X	X
Ψ	—	—
Ω	—	—

*廃字

のに伴い、ラテン語を話していた地域では、ラテン語を学ばなければ理解できない外国語となっていた。同時にラテン語は形を変え、ロマンス諸語（イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語など）の祖語となっていた⁵⁾。

教会の中で生き続けたラテン語は⁶⁾、12世紀、ギリシャ語文献、アラビア語文献をラテン語に

翻訳するという動き（12世紀ルネサンス）で中世ラテン文学が栄えたことによって再び蘇った。さらに14世紀に入り、イタリアで、ギリシャ・ローマの古典文化を復興しようという運動（ルネサンス）が起こり、それに伴いラテン語は教会のみならず教育や外交において、ヨーロッパの共通言語として復活した⁷⁾。今でいうヨーロッパで英語が共通言語であるように、18世紀までラテン語は共通言語として使用され続けた。19世紀にはいり、めざましい科学・医学の進歩とともに、英語は他の言語から借用することなく新しい語を造ることができるくらい成熟した。ラテン語がギリシャ語を吸収し、ラテン語化していったように、ラテン語は英語に吸収され、次々と英語化されていった⁸⁾。

3. 学術用語とラテン語文法

医学用語の多くは、古典ギリシャ語に由来し、2000年の歴史がある。しかしローマ帝国の繁栄に伴って、ラテン語独自の医学英語も作られたが、多くはギリシャ語の医学用語を採り入れて、ローマ字化していった。例えば、ギリシャ語 $\kappa \alpha \rho \kappa \acute{\iota} \nu \omega \mu \alpha$ は carcinoma とラテン語転写された⁹⁾。前述したように、ラテン語は18世紀までヨーロッパの標準言語であったことから、医学用語はラテン語で継承されていった。特に、解剖学用語は現在もラテン語で統一されている。またラテン語はキリスト教のみならず、哲学や科学の分野で、長く必須の言語であったことから、ニュートン（1642-1727）、コペルニクス（1473-1543）、ガリレオ（1564-1642）、ケプラー（1571-1630）、リンネ（1707-1778）など、近代を代表する自然科学者はすべてラテン語で著作していた。中でもリンネは、生物学的分類による学名をすべてラテン語にして種の表記方法を統一し、現在の生物の学名はリンネの命名法に基づいている¹⁰⁾。

ラテン語には冠詞がないのが特徴である。しかし、動詞、名詞、形容詞は複雑な語形変化をする。リンネの命名法に基づいた学名は、属名

を単数主格の名詞、種小名を形容詞または属格の名詞を使い、この場合の形容詞は属名の性と一致しなければならないというルールがあり、その他の学術用語もこれに基づいている。そこでラテン語の名詞、形容詞について学術用語の観点から述べる。

ラテン語の名詞、形容詞には性・数・格の概念がある。性は男性・女性・中性の3種類に分類される。形容詞は名詞の性に応じて語形変化する。数は英語と同様、単数と複数の2種類である。格は主語であることを示す主格、目的語を示す対格、所属を示す属格、間接目的語を示す与格、分離・手段その他いくつかの意味を示す奪格、そして呼びかけの際に用いられる呼格がある。さらに名詞は、語尾によって第1～5までの5種類の語形変化に分類される。一方、形容詞は、第1・2変化と第3変化の2種類がある¹¹⁾。

ここで、学術用語を表すのに必要となる単数主格と属格の主な変化（表2）と形容詞の主格の主な変化（表3）を示した上で、学術用語を言語的に分析する（m：男性名詞 f：女性名詞 n：中性名詞¹²⁾）。

表2 ラテン語の名詞の単数主格・属格の変化

変化	性	主格	属格
第1変化	f	vena	venae
第2変化	m	oculus	oculi
	n	cerebrum	cerebri
第3変化 ^{注2)}	m	pes	pedis
	m	axis	axis
	f	cervix	cervicis
	n	foramen	foraminis
第4変化 ^{注3)}	f	manus	manus
	n	genu	genus
第5変化	f	facies	faciei

表3 形容詞の語尾変化（主格）

変化	性		
	m	f	n
第1・2変化 -us型 -er型	magnus niger	magna nigra	magnum nigrum
第3変化 ovalis型 afferens型 acer型	ovalis afferens acer	ovalis afferens acris	ovale afferens acre

主に学術用語は2語あるいは3語からなる。基本的に2語目が名詞の場合は属格、形容詞の場合は最初の語の性にあわせて変化するという原則がある。以下に用例を示す：

(1) 単数主格名詞+単数属格名詞の2語から成る学術用語

Canalis nervi：神経管

Canalis（管）。

Nervus（神経）は男性名詞で、第2変化するので属格は *nervi* となる。

Valva aortae：大動脈弁

Valva（弁）。

Aorta（大動脈）は男性名詞で、第1変化をするので属格は *aortae* となる。

Basis cerebri：脳底

Basis（底辺）。

Cerebrum（大脳）は中性名詞で、第2変化をするので属格は *cerebri* となる。

(2) 単数主格名詞+形容詞の2語からなる学術用語

Nervus vagus：迷走神経

Nervus（神経）は男性名詞であることから、後続の *vagus*（さまよう）も男性となる。*Vagus* は第1・2変化の形容詞であることから *vagus* となる。

Medulla oblongata：延髄

Medulla（髄）は女性名詞であることから、後続の *oblongatus*（長楕円形の）も女性とな

る。*Oblongatus* は第1・2変化の形容詞であることから *oblongata* となる。

Os frontale：前頭骨

Os（骨）は中性名詞であることから、後続の *frontalis*（前頭の）も中性となる。*Frontalis* は第3変化の形容詞であることから *frontale* となる。

(3) 3語以上から成る学術用語の場合も、基本的に2語の場合と同様に变化する。ここで注目すべきは3語目の *dexter*（右の）である。第1・2変化する形容詞 *dexter* は、1語目の名詞の性に影響されるため形が変わっている。これがラテン語の特徴である。

Arteria coronaria dextra：右冠動脈

Arteria（動脈）は女性名詞であることから、2語目の *coronarius*（冠状の）も女性となる。*Coronarius* は第1・2変化の形容詞であることから *coronaria* となる。さらに3語目の *dexter*（右の）は *arteria* と同様に女性となり、*dextra* となる。

Ventriculus cordis dexter：右心室

Ventriculus（室）は男性名詞である。2語目の *cor*（心臓）は中性名詞で、第3変化するので属格は *cordis* となる。3語目の *dexter* は *ventriculus* と同様に男性となり、*dexter* となる。

Atrium cordis dextrum：右心房

Atrium（房）は中性名詞である。2語目の *cor*（心臓）は中性名詞で、第3変化するので属格は *cordis* となる。3語目の *dexter* は *atrium* と同様に中性となり、*dextrum* となる。

4. 複数形について

現代英語で複数形を作る場合、語尾に -(e)s をつけるのが原則である。しかし古英語では性・数・格が存在する。例えば、child の語源である古英語 *cild*（子供）の複数形は *childru* で、中英語で *childre*, *childer* となり、これに弱変化の複数語尾 -(e)n が付加され、*children* となった¹³⁾。

このように、英語の文法の歴史的な変遷により、不規則な変化をする名詞が今も残っている。一方で、ラテン語由来の複数形がそのまま英語に導入され、英語の中で不規則な変化をする名詞といわれるものもあり、特に自然科学分野の用語の中にそのような単語が多く残っている。表4はそのような単語を検証するのに必要となるラテン語の主格名詞の「数」の変化を示している¹²⁾。

表4 ラテン語の主格名詞の単数と複数の変化

変化	性	単数	複数
第1変化	f	<i>vena</i>	<i>venae</i>
第2変化	m n	<i>oculus</i> <i>cerebrum</i>	<i>oculi</i> <i>cerebra</i>
第3変化	m m f n	<i>pes</i> <i>axis</i> <i>cervix</i> <i>foramen</i>	<i>pedes</i> <i>axes</i> <i>cervices</i> <i>foramina</i>
第4変化	f n	<i>manus</i> <i>genu</i>	<i>manus</i> <i>genua</i>
第5変化	f	<i>facies</i>	<i>facies</i>

本論では、14世紀にラテン語から直接導入され、その複数形は英語の規則で *fetuses* になった *fetus* (胎児) のような例ではなく、ラテン語から単数形も複数形も取り入れた例を羅和辞典(水谷; 2011)で調べた。そしてそれらの語の英語への導入年代を調べ(小西友七他; 1999、Online Etymology Dictionary)、以下に示した(表5)。ただし、ラテン語由来の単語が多く残っている解剖学分野の単語に関しては、一般的なもののみを取り上げた。

古英語期(450-1100年)の名詞は、性・数・格の影響で語形変化が行われ、1つの名詞に対し、いくつもの複数の形が存在した。しかし、中英語期(1100-1500年)に入り、性が消失して語形変化が簡略化した。古英語の複数形で使われていた *-en* 接辞および *-(e)s* で複数形を表すようになり、さらに15世紀以降は *-(e)s* 接辞にとって代わられた¹⁴⁾¹⁵⁾。

表5 名詞の主格単数と複数の変化

英語			ラテン語(単数→複数)
単数	複数	導入年代	
abacus (そろばん)	abaci abacuses	14世紀後半	<i>abacus</i> (砂の台) 第2変化→ <i>abaci</i>
abdomen (腹)	abdomina abdomens	1540	<i>abdomen</i> (腹) 第3変化→ <i>abdomina</i>
analysis (分析)	analyses	1580	<i>analysis</i> (分析) 第3変化→ <i>analyses</i>
antenna (触角)	antennae	1640	<i>antenna</i> (触角) 第1変化→ <i>antennae</i>
apparatus (器具、装置)	apparatus apparatuses	1620	<i>apparatus</i> (道具) 第4変化→ <i>apparatus</i>
appendix (付録)	appendices appendixes	1540	<i>appendix</i> (付録) 第3変化→ <i>appendices</i>
aquarium (水槽、水族館)	aquaria aquariums	1850	<i>aquarium</i> (家畜の水飲み場) 第2変化→ <i>aquaria</i>
axis (軸)	axes	1540	<i>axis</i> (軸) 第3変化→ <i>axes</i>

英 語			ラテン語 (単数→複数)
単 数	複 数	導入年代	
bacterium (細菌)	bacteria	1830	<i>bacterium</i> (細菌) 第2変化→ <i>bacteria</i>
basis (基礎)	bases	1570	<i>basis</i> (土台) 第3変化→ <i>bases</i>
cerebrum (脳)	cerebra cerebrums	1610	<i>cerebrum</i> (脳) 第2変化→ <i>cerebra</i>
crisis (危機)	crises	15世紀初期	<i>crisis</i> (危機) 第3変化→ <i>crises</i>
criterion (基準)	criteria criteria	1610	ギリシャ語 <i>kriterion</i> * (判断) が <i>critierium</i> としてラテン語化、 第2変化→ <i>criteria</i>
curriculum (カリキュラム)	curricula curriculum	1820	<i>curriculum</i> (走ること) 第2変化→ <i>curricula</i>
datum (データ)	data	1640	<i>datum</i> (贈り物) 第2変化→ <i>data</i>
diagnosis (診断)	diagnoses	1680	<i>diagnosis</i> (診断) 第3変化→ <i>diagnoses</i>
duodenum (十二指腸)	duodena duodenums	14世紀後半	<i>duodenum</i> (十二指腸) 第2変化→ <i>duodena</i>
fauna (動物相)	faunae faunas	1770	<i>fauna</i> (動物相) 第1変化→ <i>faunae</i>
flora (植物相)	florae floras	1770	<i>flora</i> (植物相) 第1変化→ <i>florae</i>
focus (焦点)	foci focuses	1640	<i>focus</i> (暖炉) 第2変化→ <i>foci</i>
formula (定式)	formulae formulas	1630	<i>formula</i> (美、定式) 第1変化→ <i>formulae</i>
fungus (菌類、真菌)	fungi	1520	<i>fungus</i> (きのこ) 第2変化→ <i>fungi</i>
helix (らせん形)	helices	1560	<i>helix</i> (らせん形のもの) 第3変化→ <i>helices</i>
hypothesis (仮説)	hypotheses	1590	<i>hypothesis</i> (主題、仮説) 第3変化→ <i>hypotheses</i>
index (索引)	indices indexes	1570	<i>index</i> (情報提供者) 第3変化→ <i>indices</i>
medium (中間)	media mediums	1580	<i>medium</i> (真ん中) 第2変化→ <i>media</i>
medulla (髄)	medullae medullas	1650	<i>medulla</i> (髄) 第1変化→ <i>medullae</i>
minimum (最小限)	minima minimums	1660	<i>minimum</i> (最小) 第2変化→ <i>minima</i>
nucleus (核)	nuclei	1700	<i>nucleus</i> (堅果の仁) 第2変化→ <i>nuclei</i>
oasis (オアシス)	oases	1610	<i>oasis</i> (オアシス) 第3変化→ <i>oases</i>

英 語			ラテン語 (単数→複数)
単 数	複 数	導入年代	
ovum (卵子)	ova	1700	<i>ovum</i> (卵) 第 2 変化→ <i>ova</i>
parenthesis (括弧)	parentheses	1540	<i>parenthesis</i> (挿入文) 第 3 変化→ <i>parentheses</i>
phenomenon (現象)	phenomena	1570	<i>phaenomenon</i> * (現象) 第 2 変化→ <i>phenomena</i>
placenta (胎盤)	placentae placentas	1670	<i>placenta</i> (平たいケーキ) 第 1 変化→ <i>placentae</i>
radius (半径)	radii radiuses	1590	<i>radius</i> (棒、半径) 第 2 変化→ <i>radii</i>
serum (血清)	sera serums	1670	<i>serum</i> (乳漿) 第 2 変化→ <i>sera</i>
series (ひと続き)	series	1610	<i>series</i> (ひと続き) 第 5 変化→ <i>series</i>
species (種)	species	1550	<i>species</i> (見ること) 第 5 変化→ <i>species</i>
spectrum (スペクトル)	spectra	1610	<i>spectrum</i> (像) 第 2 変化→ <i>spectra</i>
stimulus (刺激)	stimuli	1680	<i>stimulus</i> (突き棒) 第 2 変化→ <i>stimuli</i>
syllabus (概要)	syllabi syllabuses	1650	<i>syllabus</i> (概要) 第 2 変化→ <i>syllabi</i>
symposium (討論会)	symposia symposiums	1580	<i>symposium</i> (宴会) 第 2 変化→ <i>symposia</i>
thesis (題目)	theses	14世紀後期	<i>thesis</i> (題目) 第 3 変化→ <i>theses</i>
uterus (子宮)	uteri uteruses	1610	<i>uterus</i> (子宮、腹) 第 2 変化→ <i>uteri</i>

*-on で終わる名詞は主にギリシャ語系の名詞であるが、ラテン語化し第 2 変化の -um と同じように変化する。

表 5 から、14 世紀後半からラテン語の複数形が英語に流入し始め、16～17 世紀にほぼ集中していることがわかる。しかし 18 世紀以降、一部の例外を除いてラテン語由来の複数形はほとんどみられない。19 世紀に導入された aquarium については、ラテン語の意味「家畜の水飲み場」ではなく “an artificial pond or tank, in which aquatic plants and animals are kept alive for purposes of observation and study”¹⁶⁾ の意味で、また bacteria (細菌) に関しては、ドイツの博物学者エーレンベルクによって、ラテン語と同じ意味で 1838 年に科学用語として紹介されてい

る¹⁷⁾。いずれの単語も科学的な研究を行う際に、相当する英語が見つからなかったため、急きょラテン語から抽出したものではないかと考えられる。一方 curriculum は 1820 年代に英語に導入されているが、1630 年代にはすでに、スコットランドの大学でラテン語として紹介され用いられていた¹⁸⁾¹⁹⁾ という経緯がある。

英語史的にみると、18 世紀には英語の規範文法が確立し、1721 年に最初の本格的な英語辞書が編纂されたことから、英語が言語として確立した時期である²⁰⁾。そのため 18 世紀には、ラテン語に頼らなくても英語で十分に語形成できる

ようになったと考えられる。今回、ラテン語由来の英語の複数形を検証してみたが、ラテン語の視点からみても、英語の複数形 -s は18世紀に確立し、定着したものと考えられる。

5. おわりに

英語で学術用語を作る際、例えば dis-+infect +ion からできている disinfection (消毒) のように「接頭辞+語根+接尾辞」が基本形である²⁰⁾。Uni-(1)、bi-(2)などの数詞はもちろんのこと、多くの接辞や語根といった基本構成要素のほとんどは、ラテン語・ギリシャ語、あるいはラテン語化されたギリシャ語由来である。例えば、otorhinolaryngology (日本語：耳鼻咽喉科、英語：ear, nose and throat) は、ラテン語由来の接辞である oto-「耳」、rhino-「鼻」、laryngo-「喉頭」、-logy「学問」が機械的に追加されて語が構成されている。さらに学術用語を形容詞化する場合に用いられる接尾辞、例えば、-able (-abilis)、-al (-alis, -ale)、-an (-anus)、-ar (-aris)、-ary (-arius)、-ate (-atus) -form (-formis)、-ic (-icus)、-ical (-icalis)、-ine (-inus)、-ive (-ivus)、-ory (-orius)、-ous (-osus) などラテン語由来である²²⁾。上記の otorhinolaryngology も接尾辞をつけて otorhinolaryngologic(al) として形容詞化することができる。このように現代英語は接辞を駆使し、次々と新語を作ったり、品詞転換したりしている。これは、派生のための接辞が豊富で、体系的に語を生み出してきたラテン語に由来する。

最近、学術用語はラテン語ではなく、それぞれの国の言語にあわせたものでよいのではないかという意見がある。例えば、日本における解剖学用語は、英語・ラテン語・日本語の3種類の言語で記述されている。言語は常に変化するものである。しかし、学術用語は国際的に通用しなければならないし、時代によって変化すべきものではない。ラテン語は、長い歴史をもち、体系的に語を生み出してきた。話し言葉としては死語になっているが、死語になっているから

こそ、発音・文法・造語法において変化することがない。学術用語は規則性を保ちながら、統一され、どこの国に行ってもわかる「記号」のような役割を果たさなければならないと考える。英語は、現代社会において国際語であることは周知のことであるが、生きた言語であることから、変化する可能性がある。例えば、第3大臼歯の学名は *dens serotinus* であるが、英語では *third molar*、さらに一般名として *wisdom tooth* (智歯、親知らず) ともいう。言語によって表記の仕方が変わったり、別名があっては統一性を欠くことになる。この統一性の点からも、死語で変化しないラテン語の規則性が必要となる。時代の流れに伴い今後、英語の学術用語が一般的になっていくであろうが、言語の普遍性の観点からいうと、ラテン語は根幹部分で規則性を保ち、英語の中で生き続けなければならないという使命がある。

1800年以上にわたってヨーロッパの地中海周辺地域で生き続けたラテン語は、英語の台頭により、あっけなく消滅した。しかし不思議なことに書物や文献の中では、その変わらぬ規則性を保ちながら、英語の根幹を支配し現在も生き続けている。

今回特に注目したのは、英語の複数形である。現代英語で複数形を作るには、基本的に名詞に -(e)s をつける。しかし、その規則が通用しない複数形が存在することに気づく。そこには、英語にはかつて性・数・格の複雑な語形変化があったこと、また歴史の流れの中でたびたびラテン語と接触し、ラテン語が流入したという言語学的変遷があつてのことである。今回はラテン語の観点から複数形をみていったが、さらにラテン語と英語の接触の歴史から、どのような時代になどどのようなラテン語が英語に流入していったかを検証していくことは興味深い。

注

- 1) もともとギリシャ語の文字の中にはFとQに相当する文字があり、ラテン文字にF、Qとして導

入されたが、後に廃字となった。Wは英語で double u と呼ばれるように、7世紀頃には uu と綴られていた。しだいに英語の中でWとして、一つの独立した文字となった。

- 2) 第1、2、4、5変化に属さないものが第3変化である。第3変化の語は他の変化語と違って個別に変化するため、ここでは代表的なものを取り上げた。
- 3) 第4変化の語尾は第2変化と同じだが、異なる変化をする。ただし第4変化の名詞は少なく、限られている。

参考文献・参考 URL

- 1) 松本克己 (1981) 「ギリシア・ラテン・アルファベットの発展」『世界の文字 講座言語第5巻』大修館書店, 75-106頁.
- 2) Austin, P. K. (2008) *One thousand languages* = 澤田治美 (訳) (2010) 『世界言語百科』終風舎, 240頁.
- 3) 日本エトルリア協会 ‘エトルリア語入門’
<<http://giappone-etrusco.rejec.net/>>
(平成24年10月30日閲覧)
- 4) Dangel, J. (1995) *Histoire de la langue latine* = 遠山嘉一郎, 高田大介訳 (2003) 『ラテン語の歴史』白水社, 16頁.
- 5) 小林標 (2010) 『ラテン語の世界』中公新書, 21-39頁.
- 6) 同上書 232-240頁.
- 7) 前掲書4) 65-66, 269-273頁.
- 8) Baugh, A. C. (1978) *A history of the English language* = 永嶋大典他訳 (1989) 『英語史』研究社, 371-383頁.
- 9) 二宮陸雄 (1986) 『これだけは知っておきたい 医学ラテン語』講談社, 7-9頁.
- 10) 前掲書5) 257-258頁.
- 11) 前掲書4) 55-82頁.
- 12) 前掲書9) 82-104頁.
- 13) 荒木一雄, 近藤健二, 藤原保明 (1993) 『古英語の初歩』英潮社, 30-40頁.
- 14) 中尾俊夫, 寺島廸子 (1989) 『図説英語史入門』大修館書店, 51-53, 112-113, 175頁.
- 15) 中尾俊夫 (1989) 『英語の歴史』講談社, 91-106, 150-152頁.
- 16) Simpson, J. A., Weiner, E. S. Burchfield, R. W. (1998) *The Oxford English Dictionary, Second edition, Volume I*, Longman Group UK Limited, PP.595.
- 17) Online Etymology Dictionary ‘bacteria’
<<http://www.etymonline.com/index.php>>
(平成24年11月15日閲覧)
- 18) Simpson, J. A., Weiner, E. S. Burchfield, R. W. (1998) *The Oxford English Dictionary, Second edition, Volume IV*, Longman Group UK Limited, PP.152.
- 19) Online Etymology Dictionary ‘curriculum’
<<http://www.etymonline.com/index.php>>
(平成24年11月15日閲覧)
- 20) 前掲書14) 163-167頁.
- 21) 平井美津子 (2011) 『語源で学ぶメディカル・イングリッシュ550』, 南雲堂, 4-11頁.
- 22) Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. (1980) *A Grammar of Contemporary English* Longman, PP.1004-1005.

参考辞書・参考 URL

- 水谷智洋編 (2011) 『羅和辞典』研究社。
- 小西友七, 安井稔他編 (1999) 『ランダムハウス英和大辞典 第2版』小学館。
- ステッドマン医学大辞典編集委員会 (2008) 『ステッドマン医学大辞典』メジカルビュー社。
- Online Etymology Dictionary
<<http://www.etymonline.com/index.php>>
(平成24年11月15日閲覧)